

令和元年度（2019年度）

事業報告書

平成31年（2019年）4月1日から
令和02年（2020年）3月31日まで

一般財団法人 MRAハウス

目 次

令和元年度（2019年度）事業の概況

<経営環境>	1
<MRAハウスの設置経営>	1
<公益目的事業>	1
【Ⅰ】「国際相互理解の増進」を図る事業（継1）	1
【自主事業】	1
【助成事業】	3
《学生団体》	5
《一般団体》	7
【会費・寄付】（継1 関連）	10
【Ⅱ】「国際的リーダー、青少年の人材育成」を図る事業（継2）	10
【Ⅲ】「民間公益活動の振興」を図る事業（継3）	11
【会費・寄付】（継3 関連）	12

令和元年度 事業報告

令和元年度（2019年度）事業の概況

<経営環境>

今年度の事業は、「国際相互理解の増進」をはじめとして、各種助成・寄付の交付を事業計画に沿って実施した。関係団体と連絡を密にし、企画やプログラムの成果向上に取り組んだ。新型コロナウイルスの影響を受け、年度末に実施予定であった事業の中には、延期または中止となるプログラムがあった。

<MRAハウスの設置経営>

六本木「MRAハウス」は、交通の便や事務所・集会所として、設備・機能についても良好である。西側の隣地にはホテルが建設されオープンしたが、日常の業務には特に支障はなかった。

麻布「MRAハウス」は3月26日に竣工引き渡しを受け、4月10日移転予定であったが、新型コロナウイルスの影響を受け、延期することとした。

<公益目的事業>

「国際相互理解の増進」、「人材の育成」、「民間公益活動の振興」を図る事業は事業計画に沿ってほぼ予定通り実施したが、新型コロナウイルスの影響で年度末に実施予定の事業の中には、延期または中止となるプログラムがあった。

【I】「国際相互理解の増進」を図る事業（継1）

【自主事業】

●日本・アジア国際交流プログラム（OCA国際交流事業）

① タイ学生日本研修プロジェクト

開催日程：5月22日～31日（10日間）

開催場所：大阪、中津川、東京、埼玉

参加者： タイ側：チュラロンコン大学生12人、教授1人

日本側：関西学院大学生16人、教授2人、大阪大学生7人

中津川ホストファミリー30人、中央大学生10人、教授3人

埼玉大学生12人、タイ留学生4人、教授2人 合計99人

テーマ：タイの学生と日本各地の大学生が交流して友達を作る、中津川でのホームステイを通じて日本の生活に触れ、理解する。

概要：1. 今年から関西学院大学が参加。尼崎の老人ホームを訪問、介護マシーン等を視察した。大阪西成地区を見学。

2. 中津川で今年も2泊3日のホームステイを行った。

3. タイ大使館でハンサーン・ブンナーク大使を訪問、大使からタイ日交流の歴史を1時間半にわたり講義を受けた。

4. 中央大学、埼玉大学の学生と交流、11月にチュラ、中央、埼玉の学生が北部タイを訪問することになった。

②台湾リハーサル

開催日程：6月7日～10日(4日間)

開催場所：台中

参加者：台湾キャスト 6人、インストラクター 1人、合計 7人

テーマ：アジアンビートプロジェクトに参加予定の台湾キャストにプロジェクトの説明とパフォーマンスの練習を教える。

概要：1. 台湾側からの要請で毎年リハーサルを行っている。

2. アジアンビートプロジェクトの説明をしたところ参加学生の多くがプロジェクトの実施時期に中間テストがあることが分かり、タイ側と実施時期の再交渉を依頼された。(このリハーサルの後タイ側と交渉したが、タイ側では変更不可との事、台湾には2月に実施時期を連絡済みであったことから、アジアンビートプロジェクトの実施時期は変更しないこととなった。)

③おにぎりフレンズプロジェクト

開催日程 7月17日～31日(15日間)

開催場所 東京、中津川、群馬

参加者：参加キャスト 11人(米国7人、ベルギー、中国、韓国、ドイツ、各1人)
東京ホストファミリー 21人、中津川ホストファミリー 40人
群馬ホストファミリー 41人、スタッフ 4人、合計 117人
他に中津川福岡中学の学生、和太鼓チームの学生、群馬の日伯学園の学生、
コモンビート郡馬のキャスト等多くの方々との交流ができた。

テーマ：UWPのアラムナイを中心に世界の若者が来日し、15日間すべてホームステイを行って、日本の普通の生活を体験する。交流会を多数開催して友達を作る。

概要：1. 今回は地域責任者を決め、ホームステイの確保、交流会の準備を行った。

2. ショウパフォーマンスを全員で準備し、中津川の重要文化財「常盤座」でホストファミリー関係者に、群馬でコモンビート郡馬のキャストにパフォーマンスを披露した。
3. 群馬県太田市はブラジル人が多く暮らしている。日伯学園の学生と交流会を行った。

④サマーキャンプ

開催日程：9月4日～11日(8日間)

開催場所：代々木オリンピックセンター

参加者：台湾キャスト 7人、韓国キャスト 2人、日本キャスト 8人
スタッフ 3人、合計 20人

他に昨年のアジアンビートメンバー7人が参加してくれた。

テーマ：10月に行われるアジアンビートプロジェクトの準備、パフォーマンス作り、事前に友達になること。

概要：1. アジアンビートプロジェクトの実施時期が中間試験と重なった台湾キャスト7人もサマーキャンプに参加して、アジアンビートに参加する日本、韓国のキャストと交流プログラムを楽しんだ。

2. 今回のアジアンビートの歌とダンスを練習し、台湾で流行っている歌を披露したりして交流を楽しんだ。
3. 台風15号の影響で帰国が1日延期になった台湾、韓国のキャストは我妻君の家で民泊して次の日帰国した。

⑤北部タイプロジェクト

開催日程：11月2日～10日(10日間)

開催場所：タイ チェンマイ、チェンライなど

参加者：中央大学学生 8人、教授 1人、埼玉大学学生 3人、
チュラロンコン大学学生 4人、スタッフ 2人、合計 18人

テーマ：5月に来日したタイの学生と一緒にチェンマイ、チェンライの大学を訪問して
タイの地方都市の将来を考える。

概要：チェンマイ大学、チェンライのメイファンルアン大学の学生と交流。メイコック
ファーム、バーンロムサイを訪問。バンコック一局集中の経済発展のもと、タイの
地方都市がこれからどのように発展してゆくべきかを話し合った。

⑥ アジアンビートプロジェクト

開催日程：10月26日～11日4日(10日間)

開催場所：タイ チェンマイ大学、メイファンルアン大学

参加者：日本側 11人、韓国側 2人、スタッフ 4人、合計 17人

テーマ：多国籍のキャストが集まって一つの舞台を作り上げる歌とダンスの交流

概要：チェンマイ大学で100人の学生を、メイファンルアン大学で300人の学生を集めて
交流会を行った。メイファンルアン大学の公演には多くのMFUのバンド、ダンスク
ラブが参加し、学園祭のような公演会となった。

⑦ OCA レポート

テーマ：2018年度OCA国際交流活動の年度報告書の作成

概要：1. 表紙を入れて24ページの報告書を作成した。

2. 日本語版200部、英文版80部を印刷し、関係者に発送した。

【助成事業】

(1) コモンビート

① スクールプロジェクト

開催日程：4月～2月

開催場所：東京、神奈川、静岡、愛知、鹿児島、福島、秋田、兵庫、福岡、宮城、三重
の38校の小中学校

参加者：ファシリテーター(講師)6人+帯同サポーター、生徒 38校、合計 2,448人

テーマ：主に小学校を訪問し、子供達にダンスを通じての国際理解や自由な表現を楽しむ
授業を届けるプロジェクト。

概要：1. これまでは都立校への訪問が中心だったが、2019年度は東北、関西、九州等、
都内以外での開催を増やすことができた。

2. ファシリテーター育成講座の充実を図り、地方での展開ができるようにファシ
リテーターの育成を進めた。

3. 8月1日に名古屋市の教員向けワークショップを行った。多数の参加があり、
今後中部地域での展開が期待される。

4. 子供だけでなく親子参加のワークショップの依頼が増えている。親子参加交流
ができるパッケージプログラムを作る必要がある。

② Up With People 国際教育プログラム参加支援制度

コモンビートのメンバーをUp with Peopleに派遣するプログラムに資金提供した。

2019年 Cast B：1名 2020年 Cast A：支援該当者なし

(2) シング・アウト・アジア

① クロスカルチャー・リーダーシップ・トレーニング

1. **Japan Visit2019** 7月31日～8月8日 東京、奥多摩、鎌倉で開催
参加者：ベトナム4名、インドネシア4名、タイ1名、日本9名、付添2名
概要：東京、奥多摩、鎌倉でパワー・オブリーダーシップ訓練と日本をより良く知る体験型プログラムを実施（奥多摩キャンプ、コカ・コーラ工場見学、中央大学訪問、東京・鎌倉の歴史名所めぐりなど）
2. **CCT ファシリテーター養成合宿** 9月17日～22日 ハノイ（ベトナム）で開催
参加者：インドネシア4名、タイ3名、マレーシア2名、ホーチミン2名、ハノイ5名、日本3名、付添1名（CCT実践には15名の大学生も参加）
概要：ハノイにてチームに分かれてのCCT練習と実践を実施
3. **CCT合宿2019** 3月16日～25日 ダナン（ベトナム）で開催（予定）
コロナウイルスの感染拡大の影響により中止

② アカペラ合宿&コンサート in バンコク 9月9日～16日

参加者：タイ10名、日本14名

概要：タイと日本の学生が1週間バンコクで合宿を行った。ホテルでの共同生活、アカペラの合同練習、小学校でのワークショップ、様々な交流イベント、劇場での合同コンサートを行った。音楽を通じて友情を深め、1つのコンサートを作り上げることによって深い繋がりをもつことができ、忘れられない大切な思い出となった。

(3) (公益財団法人) 日本国際交流センター

① 日米議員交流：民主化外交をめぐる日米対話

9月17日～21日 ワシントンで開催

参加者：超党派国会議員5名、研究者メンバー4名、JCIE 4名

『民主主義の未来研究会』の一環として超党派の国会議員および研究会メンバーでワシントンを訪問し、米国の議会関係者、関係諸機関、オピニオンリーダーとの対話、情報交換を行った。主要論点としては、米国の民主主義の現状、国際的な状況、日本への期待などがあり、濃密なスケジュールの中で活発な意見交換が行われた。

② 日米青年政治指導者交流プログラム

11月16日～26日 東京、高知、愛知で開催

参加者：米国若手政治関係者7名（地方議会議員、企業・団体等の政府関係部門幹部、NPOやシンクタンク関係者等）

米国若手政治関係者が7名来日し、東京、高知、愛知を訪問した。政治、経済、社会の課題に関してブリーフィングを受けたり、意見交換を行った。これまでの参加者は、日米両国で延べ300名にのぼり、歴代の参加者間で世代を超えた広範なネットワークが形成されている。

《学生団体》

(4) 第38回 日中学生会議

8月5日～8月22日 広島、奈良、東京で開催

参加者：日本側30名、中国側28名

総合テーマ：『緒』～対話から紡ぐ、友好の“糸”～

日中学生会議は日中両国の学生が共同生活における議論を通して、グローバルな人間力、洞察力を学び、相互理解を深めることで、日中関係の改善に貢献することを目的としている。本会議に向けて、5、6、8月に事前合宿を行い、分科会とは異なる構成員で5つの勉強会を実施し、本会議で必要となる前提知識の吸収や人間関係の構築を行った。本会議は日本国内の3都市を移動しながら行われ、それぞれの都市で研修やフィールドワーク、観光を行った。日中両国の学生およそ60人が7つの分科会グループを作り、日本・中国の社会問題などについて議論を行った。議論した内容は最終発表会で発表され、報告書を作成した。

12月22日 報告会を実施

(5) 第65回日本国際学生会議

8月21日～9月2日 本会議は東京で開催

参加者：日本人学生34名、外国人学生23名

総合テーマ：『多様性の真価を享受する～今を生き、明日を創る力として～』

西日本5都市で事前研修後、東京で本会議を開催。使用言語は英語で、分科会議論、日本文化体験、フィールドトリップ、各種交流企画を行った。参加者間での国際相互理解、日本文化理解の促進、個人の主体性やリーダーシップの養成を目指した。

9月1日 成果発表会実施

(6) International Week West Japan

9月2日～9月8日 大阪、奈良、兵庫、京都で開催

参加者：国内大学生20人、海外12人（世界10ヶ国からの留学生）

総合テーマ：「経験」～日本の学生になる7日間～

世界の学生団体がネットワークを繋げ、約1週間、各国の文化、交流、経営の仕方、経済の状況を確認する場である。世界各国の学生を日本に招き、インターナショナルディナー、日本文化体験、相互文化紹介、企業訪問（神戸酒心館、象印魔法瓶記念館、大阪市立阿倍野防災センター）などを通して文化交流や他国の学生と交流し、相互理解を図った。

(7) 第31回日本ロシア学生会議

8月7日～8月22日 本会議はモスクワで開催

参加者：日本側12名、ロシア側15名

4～7月まで日本国内で分科会ごとに勉強会を7回実施し、フィールドワークでは平和記念展示資料館でシベリア抑留の講義を受け、直前合宿も行き本会議での深い議論に備えた。本会議では日露両国の学生が3つの分科会（国際関係、環境、メディア）に分かれ、学術的な観点から議論を行った。またフィールドワークとして、宇宙飛行士訓練センター、民族センターを訪問し、ロシアの宇宙技術と民族の理解を深めた。これらの活動を通して日露学生間の相互理解と信頼関係を築くことができた。本会議後は勉強会で報告書を作成した。

10月26日 報告会実施

(8) 第35回日韓学生フォーラム

8月6日～8月20日 東京、大阪、金沢で開催

スローガン：「Unite Our Sight」

関西・関東各地で毎月2～3回の勉強会を行い、基礎知識を身につけ、本会議に備えた。

第1回全国合宿（東京）第2回合宿（大阪）

本会議の参加者 日本：13名 韓国：14名

スローガン：『Unite Our Sight』

日韓の大学生が一堂に会し、日韓関係から世界的な問題まで幅広い分野の学術討論や文化交流を行った。本会議前の事前活動として国内3地域に分かれて月2回程度の勉強会を行い、日韓両国についての基礎知識、英語力の習得を図った。又、2月と6月には全国合宿を行い、日本側メンバーの集中的な議論の場を設け、本会議に向けた準備を進めた。

(9) Y20 Summit 2019 Japan

団体名：G7/G20 Youth Japan

5月26日～30日 Y20 Summit 2019 Japan 議員会館（東京）で開催

参加者：Y20 代表団（40人）（G20 各国から30歳以下の代表2名ずつ）

5月26日 Y20 パブリックイベント 立教大学で開催 参加者：1,000人

Y20は毎年、G20開催国にて、G20に先立ち開催される。2019年は日本で開催された。G20の各国2名ずつ、30歳以下のY20の代表団が選出され、5月のY20サミットで国際課題について議論を行い、政策提言文を外務省G20サミット事務局に提出した。また、サミット初日には1,000人規模のパブリックイベントを開催し、日本のユースの国際課題への理解・関心を高め、Y20代表団と直接意見交換する機会となった。

(10) 国際会議『台湾における対日理解と教育の関係性』

団体名：日本学生会議所 関西支部（UNISC 関西）（一般社団法人）

9月7日～9月10日 台湾で開催

参加者：UNISC 関西のメンバー：6名

現地参加者：20名（現地の大学生有志、現地に留学中の日本人学生）

総合テーマ：『台湾における対日理解と教育の関係性』

渡航前に日本の義務教育で使われている歴史の教科書の中で、中国や台湾について記述された箇所を読み、解釈を議論した。現地の国立台湾大学では台湾の学生とテーマに沿ってお互いの解釈や受けてきた教育内容を共有しそれらの差異と背景を探って議論した。また、国立台湾歴史博物館を訪問し、現地の文化的背景や歴史認識をさら深めた。

(11) ミャンマー・ヤンゴン市におけるゴミ教育プロジェクト

団体名：(NPO 法人) M I S

8月6日～8月9日 ヤンゴンで開催

参加者：日本側15名（東京大学）、ミャンマー側20名

現在ヤンゴン市には深刻なゴミ問題があり、このプロジェクトは独自に作成したゴミ問題マニュアルを基に、ゴミ教育を小学校や僧院学院に普及させることを目指す。今年度は昨年ゴミ問題の授業を行った僧院学院を訪問し、1年間の成果を評価した。また、新規の2つの僧院学院でもゴミ教育を導入してもらった。その際に教員とワークショップを行い、効果的な授業の方法を模索した。今回把握できたゴミ問題マニュアルの問題点を修正し、このゴミ教育プロジェクトを今後も普及させていきたい。

(12) 日中青年会議

団体名：日中青年会議

7月19日～7月25日 香港で開催

参加者：日本側20名、中国側31名、オーガナイザー28名

スローガン：『紛争は人々の心や精神の中で始まり終わるのである。丘の上で行われるのではない。』 -アモス・オズ

日本、中国本土、香港出身の約50人の中高生を対象に行われる7日間のサマーキャンプである。様々なセッション（文化、コンフリクトマネージメント、メディアリテラシー、歴史）を通して偏見のない道徳的な思考力を養い、日中間に存在する異文化を認められるような柔軟で独創的な政策提案を実施した。一生涯の関係を築き次世代の平和を作る人材育成を目指し、参加者は多くの感動と日中平和大使としての使命を胸に会議を終えた。

12月14日 報告会実施

(13) 日本ポーランド学生会議

団体名：日本ポーランド学生会議

9月8日～9月15日 ワルシャワ、トルン、ヴェイヘロヴォ（ポーランド）で開催

参加者：日本側 11 名、ポーランド側 12 名

テーマ：『日本ポーランド国交 100 周年のいまとこれから』

2019 年は日本とポーランドの国交樹立 100 年となる節目の年であり、本会議の初のポーランド開催となった。日本とポーランドの両国の学生が 1 週間寝食を共にし、両国に関するレクチャーや文化体験、現地交流をすることで互いに対する理解を深めた。教育、政治、ビジネス、文化の 4 つの分科会に分かれ議論するとともに、両国関係の歴史や意義について学ぶため、各方面有識者および関係省庁を訪問し、ワークショップ、発表会を行った。また、事前に参加者が Skype にて交流を行い、両国関係の前提知識を蓄えつつ面識を深めた。

(14) International Week Tokyo 2019 Summer

団体名：慶応義塾大学 福利厚生機関 国際関係会

8 月 11 日～8 月 25 日 東京で開催

参加者：日本人学生 84 名、交換留学生 14 名、ホストファミリー 14 家庭

テーマ：『Everlasting Tokyo』

IWCO という親団体のもと、東京支部として世界 14 ヶ国の学生を東京に招待し、文化体験（日本料理、茶道）、小旅行（鎌倉、奥多摩、富士山）、企業訪問を通しての経済、環境問題の議論など、多様性に富んだ 2 週間を通して人種の壁を越えて相互理解を図った。また、日本を世界の学生に発信し、留学生と意見交換できる場を日本の学生に提供した。留学生は一般家庭にホームステイして日本の本当の姿を体感した。

(15) 日本台湾学生会議（事情により開催が前倒しになり追加の助成として決定）

団体名：日本台湾学生会議

2 月 8 日～2 月 14 日 東京（国立オリンピック記念青少年総合センター）で開催

参加者：日本側 26 名、台湾側 31 名

テーマ：『和×輪 私たちが創る日本と台湾の未来』

年に 1 度、本開催と称する 1 週間程度の合同合宿を行うことが最大の活動であり、毎年台湾と日本で交互に開催され、今年度は東京で開催された。台湾人と日本人がそれぞれ約 30 名集い、寝食を共にしながら、両国の理解に努める分科会や日本研修、日台で活躍されている方の講演会など、様々なイベントを通して互いの文化や価値観に対する理解を深めた。今年度は多文化共生、環境、経済、教育、医療、労働の 6 つテーマに分かれて合計 8 回の分科会で議論重ね、最終発表会で発表を行った。

《一般団体》

(16) 第 24 回海外高校生日本語スピーチコンテスト・異文化交流プログラム

団体名：エデュケーション ガーディアンシップ グループ（NPO 法人）

7 月 21 日～8 月 2 日 7 月 25 日に愛媛県で世界大会を実施

世界の 15 の国と地域から 16 名出場 観覧者：2000 名

高校生ボランティア：25 名 ホームステイ受け入れ家庭：16 家庭

世界 15 カ国及び地域にて、日本語スピーチコンテストを開催し、そこでの優勝者を日本に招聘し、国際大会を開催。

コンテスト出場者はホームステイを体験。愛媛・東京・川崎などで日本文化体験や国内の青少年との様々な交流活動を通じて相互理解を深めた。

(17) キルギス視覚障害者自立のための「キルギス盲人連盟」への機材購入支援

団体名：キヤル基金

JICA シニア海外ボランティア活動時から支援し続け、1 年前に彼らが立ち上げた「キルギス盲人連盟」が今後、1 年間のトレーニング（キルギス全土から集められた 22 人の視覚障害者に対するもの）に必要としている機材を購入支援することにより、視覚障害者の自立を推進する。

支援する自立活動：白杖歩行訓練、点字習得、コンピュータ技術習得

今年度は助成金の範囲内で、白杖を 50 本寄付した。実際に現地を視察し、視覚障害者の生徒 11 名が白杖を使用して上手に歩く姿を見て、改めて白杖は命を守る重要な道具であることを実感した。

(18) 日越連携プログラムによる看護介護人材の確保と育成

団体名：外国人看護師・介護福祉士教育支援組織（NPO 法人）

ベトナムタイビン医療短期大学（看護科）「卒業生ための日本語講座」より第 1 期生 2 名が 2019 年 6 月に来日、短期大学（社会福祉学科）での勉学を開始し優秀な成績で第 1 学年を終了した。第 2 期生 6 名が 4 月に、2 名が 10 月に来日し日本語学校で勉学を開始した。8 名中 2 名が日本語能力試験（JLPT）N2 を取得し、2020 年 4 月介護福祉課程に進学する。第 4 期生 9 名（3 年生）が 2020 年 6 月のところ 3 月に繰り上げ卒業し、4 月に来日して日本語学校入学の予定であったが、3 月末にビザ効力停止となったため入国できなかった。第 2 期生 2 名と第 4 期生 9 名について、実家を訪問させていただいた。両親や親族の方にお会いし、学生の背景やベトナム文化の理解に大変有意義であった。新型コロナウイルス感染拡大の影響で 3 月にはベトナムでの活動ができなくなり、予定した日本文化、介護導入などの教育を実施できなかった。また、大学主催の留学生歓送会も中止となった。教育講演として、タイビン医療短期大学看護科の学生を対象に「認知症について」を実施し好評を得た。

(19) 青少年の国際理解教育（JICA 研修員プロジェクト）

団体名：シニアボランティアの経験を活かす会

日本の大学院に招待派遣されている JICA の研修員や来日中の大学や大学院の留学生と一緒に、小、中、高校で国際理解の出前講座を実施した。授業は相互に話しかけができる双方向の授業を行い、お互いの理解度、親睦度を深めるように工夫している。

今年度は当初 6 校での授業を予定していたが、そのうち 3 校が新型コロナウイルスに伴う学校閉鎖のため中止となってしまったので、3 校での実施となった。第 1 回は 9 月 19 日に川崎市立岡上小学校で実施。53 名の生徒に 4 名の研修員を配置して行った。第 2 回は 12 月 15 日に横浜の私立聖光学院で高校生を対象に実施。生徒 17 名と研修員 4 名が参加。生徒 4～5 名と研修員 1 名のグループで授業を行い、研修員が各国の長所、短所についてプレゼンし、プレゼンのあと主に短所について質疑、意見などを生徒が英語で行い、プレゼン 20 分、意見交換が 2 時間ほど続き有意義な授業となった。第 3 回は 2 月 26 日に横浜市立東山田中学校で実施。1 学年 7 クラスを有する大規模の学校で、3 年生 250 名を対象の国際理解講演会として同校の講堂で大規模に行われた。

(20) かるたを通じた国際交流と文化発見

団体名：ホープフル・タッチ（NPO 法人）

カンボジア側：公立小・中学校生徒 300 名、教師 4 名、ボランティア 3 名

神戸側：神戸市在住の子ども 100 名、保護者 150 名

水上生活をしているカンボジアの公立小・中学校の生徒と、神戸在住の子どもがそれぞれ母国語と描画を用いて文字ごとのかるたの読み札・絵札を作成し、各地で制作したかるたを交換展示する。制作と展示の様子を映像作品として紹介し、反応を共有するのが狙いのプロジェクトである。

今年度は対象コミュニティ小・中学校において“かるた”を紹介し、絵や文章で楽しむ体験及び自己表現が絵札・読み札として実体化する体験をレクリエーション活動として実施した。学校教育のなかで学んだ文字の読み書きを自己表現へ生かし、小学生及び中学生からクメール語カルタ制作のための絵札・読み札原案を収集。学校内での公開投票により各文字への絵札・読み札の組を採択した。日本の子ども達によるかるた作りや作品を映像化したものを対象校において共有し、生徒達は文字の違いや表現の違いを体験した。日本での作品展示については、新型コロナウイルス感染症拡大の影響でイベント自粛により達成できなかった。神戸市の保育園・幼稚園にて、保育士・教員とともに日本国内における異文化かるたの遊び方について協議しており、情勢を考慮しながら 2020 年度以降日本国内での展示や交流イベントを計画している。

(21) フィリピンフェスティバル 2019

団体名：フィリピンフェスティバル実行委員会

11月4日：スポンサー、出展者及びパートナー向けオリエンテーションを実施

11月30日～12月1日：代々木公園（東京）でフェスティバル開催

全国から20万人のフィリピン人と日本人が参加

フィリピンフェスティバルはフィリピンの文化、音楽、製品、サービス、観光地を紹介する日本で最大のイベントである。日本在住のフィリピン人を集め、日本人に対してフィリピンの文化への関心を高めてもらうことを目的とする。観客を魅了するアトラクションには、伝統的なパレード、ステージ上の文化&娯楽プログラム、フィリピンの料理、工芸品のストリートフェアなどがあり、観客は様々なプログラムを通してフィリピンの文化と伝統を体験できる。

(22) キルギス認知症高齢者・介護家族支援プログラム

団体名：The Global Research Institute（公共法人）

キルギス側参加者：3名（所属：GRI など）

日本側参加者：1名（NY大学大学院社会福祉学部）

キルギス共和国では高齢化が進んでいるが、認知症高齢者や家族介護者への公的援助が欠如しているだけでなく、認知症に関する社会一般の理解も欠けている。本事業では日本の長寿医療研究センターの認知支援プログラム及び日本で認知症の人を支援する認知症サポーターを全国で1千万人養成した全国キャラバンメイト連絡協議会の教材を適用し、キルギスでは初めての認知症の啓蒙活動を実施する。

今年度は8月から9月にかけてキルギスの研究者3名が来日し、キャラバンメイトや認知症疾患医療センターを視察し、認知症サポーター養成訓練を受講した。キルギスでは大学、医療機関、地域に拠点を置く危機管理センターなどの協力を得て、研修セミナーを実施し好評を得た。今後も認知症対策の啓蒙活動を続ける。

【認知症の研修セミナー実施】

10月11日～12月25日 計7回の研修セミナーを実施

開催地：5都市（Osh、Naryn、Karakol、Bishkek、Almaty）

参加者：計205名（医療従事者、宗教及び地域社会の指導者、警察、マスコミ関係者）

(23) 原美術館開館40周年記念イベント

団体名：原美術館

原美術館は、1979年に東京で初めての現代美術館として開館し、以降、現代の文化を介した国際交流、とりわけ人的交流による異文化間の相互理解の推進に寄与してきた。美術家のみならず、研究者、あるいは愛好家の育成に資してきた当館の開館40周年を記念する14のイベントを、約1年間を通して開催した。内外の第一線で活躍するアーティストによる講演、ディスカッション、パフォーマンス、音楽公演、公開制作、参加型ワークショップ、また、別館ハラミュージアムアークで開催した美術家と小説家による対談出席のためのバスツアーなど、国籍やジャンルを問わず、様々な価値と出会える機会を提供することができた。

(24) (公益社団法人) 国際IC日本協会

① 学校訪問プログラム

世界平和に寄与するため、海外からの青年ボランティアを招聘し、小学校から大学までを回り、各国の文化紹介を行い、また寸劇や体験談の紹介を通して、家庭や家族、そして一人ひとりの存在の大切さを伝え、未来に生きる夢と希望を与えること狙いとしている。

本年はインド・ICセンターでインターンを経験した4名の海外からの青年ボランティア（アフガニスタン、チベット、インドネシア、インド）を招聘し、5月10日～6月17日の1ヶ月間、東京、静岡、つくば市、福岡市、北九州市、佐賀、長崎で小学校から大学まで合計20校を訪問し、約2,500人の生徒や学生と交流を図り、国際理解と「心を育む」プログラムを実施。

③ IC国際会議

11月9日～11月10日 川崎市国際交流センターで開催

参加者：国内51名、海外3名

テーマ：『輝かしい共生社会のために ～今、私にできること～』

第41回目を迎えた『国際ICフォーラム』は世界において、また特に日本においても、異なる文化、宗教、習慣を有する人々同士の共生が重要になりつつある中で、それぞれの違いを如何に理解し、受け入れ、連携・協働につなげるか、それを個人、家庭、社会のレベルでどう実現していくか、真摯な論議が行われた。さらに、国内外から招聘した多様な背景を持ち、様々な経験を有する講演者のIC (Initiatives of Change)の考え方に基づいて生きる姿勢を聴講し、社会に新しい展開を切り拓いた貴重な体験を学んだ。

④ 寄付金 (団体賛助会費)

寄付金として団体賛助会費を支払った

【会費・寄付】 (国際相互理解の増進事業 関連)

- | | |
|--------------|--------|
| ① 日印協会 | 年会費 |
| ② JANIC | 年会費 |
| ③ 日本国際交流センター | 法人会費 |
| ④ 同 三極委員会 | 年会費 |
| ⑤ コモンビート | 団体賛助会費 |
| ⑥ メイコックファーム | 寄付 |
| ⑦ バーンロムサイ | 寄付 |

【II】「国際的リーダー、青少年の人材育成」を図る事業 (継2)

1) (公益財団法人) 国際文化会館

① 新渡戸リーダーシップ・プログラム

広い視野と公益の精神をもった人材育成を目指し実施した「新渡戸国際塾」の継承事業として、より多様化・複雑化する課題に対し、既存の枠にとらわれない視点や方法で取り組む若手リーダーを育成する事業。2018年度の準備期間を経て、初年度となった2019年度は、「自ら未来をデザインし、実現する～変容するボーダーをどう越えるか～」をテーマに、さまざまな領域の第一線で活躍する実践者を講師に招いた講義や研修合宿、そして実際にイノベーションが起きている現場に足を運ぶスタディツアーを実施し、講師や志を同じくする参加者、新渡戸リーダーシップ・フェロー (新渡戸国際塾修了生) とのディスカッションを通して切磋琢磨し、一人一人がよりよい社会の実現に向けて一歩を踏み出すための「場」と「機会」を提供した。今年は30名の応募があり、運営委員による書類審査を通過した25名を面接し、9名を1期生として選抜した。参加者の平均年齢は33.3歳

第1回 6月22日 (土) 開講式およびオリエンテーション

第2回 7月6日 (土) 「自ら未来をデザインし、実現するとは」

第3回 7月20日 (土)～21日 (日) 研修合宿

第4回 8月4日 (日) 文化・教育「文理の垣根を越えて創造する アイデアをつくる」

第5回 8月24日 (土) ダイバーシティ「誰もがありのままに生きるために」

第6回 9月7日 (土) 政治・経済「日本が課題解決先進国になるには」

第7回 9月21日 (土)～23日 (日) 東北スタディツアー

第8回 10月6日 (日) 課題の中間発表

第9回 10月19日 (土) 「渋沢栄一から学ぶリーダーシップ」

第10回 10月26日 (土) 地方創生「持続可能から持続確実へ」

第11回 11月16日 (土) APYLP ジョイント・セッション

「テクノロジーが創るアジアの未来」

第12回 11月30日(土) 起業・科学技術「目指すは宇宙の掃除屋」

第13回 12月7日(土) 修了式

② アジア・パシフィック・ヤング・リーダーズ・プログラム(APYLP)

国際文化会館をアジア太平洋の若手リーダーたちの日本における拠点とすべく、2017年度にAPYLPを立ち上げた。具体的には、これまで会館が実施してきた各種のリーダーシップ事業(ALFP、新渡戸国際塾など)のフェローネットワークと、米国やアジアにある同様のミッションをもつリーダーシップ事業のネットワークを結び付け、彼らが協働できる「場」をソフトおよびハード両面で提供する。2019年度はALFP、アジア21、新渡戸リーダーシップ・プログラム、日印対話プログラムのフェローと共に、全5回のジョイント・セッションを国際文化会館で実施。

第1回 9月4日(水) ALFP x APYLP ジョイント・セッション

テーマ：アジアの宗教——平和構築に宗教が果たす役割

第2回 10月29日(火) Asia 21 x APYLP ジョイント・セッション

テーマ：LGBT インクルーシブな未来を目指して——変わるアジアと日本

第3回 11月16日(土) 新渡戸リーダーシップ・プログラム x APYLP ジョイント・セッション

テーマ：テクノロジーが創るアジアの未来

第4回 12月6日(金) 朝食会

テーマ：Breakfast Dialogue with Mr. Ritesh Agarwal

第5回 12月6日(金) 日印対話プログラム x APYLP ジョイント・セッション

テーマ：インド発~テクノロジーと新しい価値の創造「人の移動と空間」

注) 一部プログラムの延期あり

2) 第12期JCIE 田中塾

団体名：日本国際交流センター(JCIE)

第12期となる2019年度は「国際秩序の行方と日本の役割」をメインテーマに、「平成」が終わりを告げ、「令和」の時代が始まり、特に従来以上に国際社会の構造変化が著しい中、世界の秩序が崩れていこうとする時、日本がいかなる外交・対外関係を展開していくべきかについて議論を深めた。今期は11月に開講後、2月21日の第7回講義までは計画通り実施したが、最終第8回は、新型コロナウイルスの影響拡大を鑑み、開催延期を決定した。

第1回 11/15 世界の構造変化のうねり：グローバルな統治体制はどうなるのか？

第2回 11/29 戦略的アプローチとは何か？

第3回 12/13 米国の展望

第4回 1/10 中国

第5回 1/24 朝鮮半島の展望

第6回 2/7 BREXIT後の欧州

第7回 2/21 中東とイラン問題の見通し

第8回 延期 日本 如何なる外交戦力を取るべきか？

【Ⅲ】「公正かつ自由で創造的な民間公益活動の振興」を図る事業(継3)

1) 女性政治家のエンパワメント研究会

団体名：日本国際交流センター

日本における女性国会議員の比率は先進国の中でも極めて低く、女性議員の母数を増やしていくことは喫緊の課題であるが、同時に女性議員の政治家としての政策能力を高め、日本のみならず国際的な課題についても関心と理解を深め活躍することが期待されている。今年度は野田聖子会長のもと、女性国会議員を中心とするインフォーマルな研究会を6回実施し、内外の専門家と意見交換、勉強の場を提供し、同時に国際社会での議論の鍛錬の場となることを目指した。

尚、3月に予定されていた第7回研究会は新型コロナウイルス感染拡大により延期。

- 第1回 3/18 SDGs と日本 —誰も置き去りにしないために日本は何をするべきか
- 第2回 5/20 国際安全保障・地政学的課題
- 第3回 6/28 国際社会における女性政治家のリーダーシップの課題
- 第4回 9/9 国際移民・難民の課題に日本はいかに対応するか？
- 第5回 12/11 AI の発展と社会へのインパクト
- 第6回 1/20 エネルギー、地球環境問題
- 第7回 延期 国際金融・経済・通商問題

2) 戦後日本の国際文化交流史の研究に資するアーカイブの構築

団体名：(公益財団法人) 国際文化会館

国際文化会館(1952年創立)には、戦後日本の民間レベルの国際文化交流史を理解する上で貴重な歴史資料(文書、音声、映像、写真など)が相当量存在する。本事業は、本会館の設立70周年(2022年)に向け、貴重な文化的公共財であるこれら史資料群の日英両語による総合的な基礎目録を作成・公開することによって、戦後の国際文化交流史への活用を可能にすることを目的としている。本事業は、3か年計画(2017年度～2019年度)で実施され、最後の2019年度には「公開準備」として、2018年度から引き続きアーカイブ基盤整備委員会での諸課題の討議、資料のデジタル化、目録の追加作成などを行ったほか、目録への分類付与を実施した。

3) 市民社会組織のよりよい制度環境の実現に向けた調査研究・政策提言

団体名：(公益財団法人) 公益法人協会

2008年に施行された新公益法人制度は、民間による公益の増進ならびに活力ある社会の実現のために策定されたものであるが、施行から10年が経過した現在の公益法人数は1万にも満たない状況であり、新制度の見直しが期待されている。本プロジェクトは新制度のあるべき姿を当局等に対し提案することを目的とし、解決が急がれる課題の整理とその対応策を検討する場として法制部会および会計部会から成る民間法制・税制調査会を設置運営する。メンバーは学識経験者、専門家、実務家で構成されている。

2019年度は5月～3月まで計9回の法制・税制調査会を実施し、成果物として調査報告書をまとめた。これを基に当局への提言を行い、併せて各種の手段を通じて広く世間に公開する。

【訪英調査ミッション】

また、解決が先送りされていた小規模法人対策として、英国の小規模法人対策やチャリティ会計の実態調査を目的として英国への視察訪問を行った。

勉強会：7月25日～1月30日全6回実施(オリエンテーション含む)

英国視察訪問：9月30日～10月4日 ロンドン、エディンバラ

参加者：学識経験者並びに会計専門家5名、内部委員4名

ロンドンでは11件、エディンバラでは3件の小規模団体、中間支援団体、政府機関を訪問して視察を行った。視察前後の勉強会では準備と報告書の作成を行い、法改正を含む政策提言につなげる。

【会費・寄付】(民間公益活動の振興事業 関連)

- ① アルカンシェール美術財団 法人賛助会員
- ② 尾崎行雄記念財団 年会費
- ③ 国際NGOセンター 年会費
- ④ アジア調査会「アジア太平洋賞」協賛金